

全中道研会報

令和5年10月21日 No.2

全日本中学校道德教育研究会
<https://www15.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=1350010>



道德教育推進教師育成講座

令和5年度の道德教育推進教師育成講座は、下記のとおり、令和5年8月5日（土）、6日（日）の2日間にわたり、板橋区立赤塚第二中学校会場への参集とオンラインを組み合わせたハイブリッド型で研修を実施しました。

8月5日(土)

○開講式

○研修A 講演「『考え、議論する道德科の授業』の充実に向けて」

○研修B 講演「学習指導案の作成について」

○研修C 教材分析

○研修D 指導案作成

令和5年8月6日（日）

○研修E 指導案作成

○研修F グループ協議の経緯・模擬授業

○研修G 講演「グループ発表総括・道德教育推進教師に望むこと」

○閉講式

研修Aは、文部科学省 井上 結香子 教科調査官に、「『考え、議論する道德科の授業』の充実に向けて」を題として、研修Bは、東京教師道場 教授 森岡 耕平 先生に、「道德科の授業の充実に向けてー学習指導案の作成についてー」を題としてそれぞれご指導いただきました。研修の概要については、後述いたしますのでご参照ください。

研修Cは、受講者が「足袋の季節」と「加山さんの願い」について教材分析してきたものをグループ内で共有するとともに、その後の研修で検討する教材を検討しました。

研修D Eは、グループ内での教材分析の議

論を踏まえ、指導案作成に向けた検討を行いました。今年度は模擬授業の形式で指導案を発表することとしましたので、より具体的な指導方法等について議論を深めることができました。また、2日間にわたるグループ協議、それもひとつの教材に時間をかけて、教材の特質を踏まえ、主題、中心的な発問について考え、議論する機会は、短時間でやる研修ではできない取組です。そういった意味では、腰を据えてじっくり検討することのできる、この道德教育推進教師育成講座の果たす役割があると考えます。

研修Fでは、グループが考えた指導案を模擬授業として発表していただきました。発表後の振り返りの時間を十分にとれなかったことは、運営上の今後の課題となりましたが、例年の指導案発表に比べて発表主旨の理解が深まったと感じました。

研修Gでは、教材分析や指導案作成等について、東京教師道場 教授 森岡 耕平 先生に改めてご指導いただきました。

今年度は、受講者にPC等の端末をご持参いただき、資料のペーパーレス化、共有フォルダの活用した共有等を行いました。インターネットに接続する環境等の課題が残ったものの、受講者からは前向きな取組であると評価していただきました。今後も研修の更なる充実を図れるよう、運営方法等を検討して参りますので、

最後に、ご指導いただきました井上結香子教科調査官、森岡耕平先生、本講座を受講された皆様、受講者を推薦していただきました理事、関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。



研修A

講演 『考え、議論する道德科の授業』
の充実に向けて
講師 文部科学省初等中等教育局教育課程課
教科調査官
国立教育施策研究所教育課程研究センター
教育課程調査官
井上 結香子 先生

1 道德科の目標と内容

令和の日本型学校教育の特徴

教育を大きく、知育、徳育、体育と分けたとき、諸外国では、徳育や体育に当たる部分を学校外で行うことが少なくない。

しかし、日本では、知育、徳育、体育を学校教育が中心となって担っている。知育、徳育、体育を学校において一体的に育成することによって、子供たちの人格の完成を目指すところに、その特色がある。その成果の一つとして日本の子どもたちは規範意識や道德心が高いと言われる。

道德教育の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道德性を養うこと」である。

道德科の目標にも「よりよく生きるための基盤となる道德性を養うため」とあり、目指すべき学習の姿を「自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める」とし、この学習を通して、道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることを目標としている。

養うべき道德性の諸様相（学校教育における道德性の捉え方）は次の4つである。

- 道德的判断力 ○道德的心情
- 道德の実践意欲 ○道德的態度

内容項目については、いじめ問題の対応等を踏まえて内容項目を体系的なものに改善した際に、小学校で、特に、内容項目を追加している。

2 学習指導要領の趣旨

新しい時代に必要となる脂質・能力を育成するために、主体的・対話的で深い学びが重要である。深い学びの鍵となる「見方・考え方」は、「自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める」という道德科の目標の学習活動と同じであると言える。答えが一つではない道德的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道德」が必要である。

3 主体的・対話的で深い学び

自分との関わりの中で捉え、多面的・多角的に考えながら議論する「主体的・対話的な学び」が教師の明確な意図により展開されることで「深い学び」へと向かう。教師は「道德的価値」「児童生徒の実態」「教材の活用」について、それぞれ明確な指導の意図をもつということが大切である。

深い学びにつながる指導方法として、具体的な学習プロセスは限りなく存在し得るが、例としては「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」「問題解決的な学習」「道德的行為に関する体験的な学習」等が挙げられる。

4 道德科の授業改善

令和3年度道德教育実施状況調査の概要から

- 道德の「特別の教科」化を受けた変化に関する回答からは、小・中学校、教育委員会とも多くの前向きな変化が伺われる。
- 道德教育のさらなる充実のために特に課題となっていることへの回答としては、「教師の指導力」が最も多かった。
- 授業を実施する上での課題に対する回答では、「話し合いや議論などを通じて考えを深めるための指導」「物事を多面的・多角的

に考えるための指導」「道徳的価値の理解を自分との関わりで深めるための指導」が小・中学校ともに多かった。

○道徳の「特別の教科」化を受けた学校における変化に対する回答としては『道徳の時間』に比べて児童生徒の『道徳科』の学習意欲が高まった」「児童生徒同士による話し合いや議論が活発になった」「道徳教育に対する教師の意識が高まった」という項目に対する肯定的な回答が8割を超えている。

○校内研修で重点を置いていることへの回答として最も多いのは「道徳科の指導」であった。今後も研修を通して指導力の向上を図ることが大切である。

○道徳科の授業をする上での課題に対する回答としては、「教材の吟味や授業構想のための時間の確保」が多かった。これは、良い授業をしたいが準備の時間がとれないという思いの表れであり、より多面的・多角的に考えさせようと取り組んでいる中で出てきた前向きな課題であると言える。

○道徳の「特別の教科」化を受けた変化への回答としては「教科書があることで、適切な教材の選択・作成等に係る負担が減った」が高い割合を示した。記述式の部分では「評価への意識の高まりとともに、評価に不安を抱える教師が増えた」という回答も見られた。

5 道徳科における評価

児童生徒の学習状況及び成長の様子について、個人内評価として見取り、記述により表現することの基本的な考え方として、「児童生徒が一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかどうか」という点が大切である。また、発言や記述ではない形で表出する児童生徒の姿に着目するということも重要である。

道徳科の評価は、年間や学期を通じて学習を重ねていく中で、学校の状況や児童生徒一人一人の状況を踏まえた評価を工夫することが求められる。

評価に当たっては記録物や実演自体を評価するのではなく、学習過程を通じての成長の様子を見取することに留意する。また、校長及び道徳教育推進教師のリーダーシップの下に学校として組織的・計画的に取り組むことが必要である。

6 道徳科の特質を踏まえたICTの活用

ICTは、道徳科の目標に示された学習が、より効果的に行われるようにするための手段として活用するものである。多面的・多角的に考える場面、自分自身との関わりの中で深める場面、根拠に基づき議論する場面等において自分の考えを端末に入力し、一気に視覚化して共有することができる。

ICTの活用に当たっては、目的と手段を間違えないことが大切である。目的は道徳性を養うことであり、そのための手段がICT活用の工夫である。手段であるはずのICT活用の工夫が授業の目的になってしまうと、教師主体の「活動あって学びなし」の授業になる。

7 道徳科の授業で大切にしたいこと

道徳科は学校の全ての教育活動の要である。

道徳科のねらい（道徳的価値）を踏まえ、道徳科の授業において、児童生徒対して「何について考えさせ、何に気付かせたいのか」という考えを明確にもつこと。

学習指導過程や指導方法、教材・教具等の工夫は、目的ではなく手段であることを再認識すること。

研修B

講演「道徳科の授業の充実に向けて ー学習指導案の作成についてー」

講師 東京都教職員研修センター研修部
授業力向上課東京教師道場 教授
森岡 耕平 先生

中学校では令和元年（2019年）度に道徳の教科化が始まってから5年が過ぎようとしている。様々な道徳の授業に立ち会ってきて、島しょでの道徳授業、外国籍の若者が増えていく夜間中学校での道徳授業、特別支援教育における道徳授業等を含め、今後も道徳科の特質を生かした授業の充実に向けて努力を重ねていくことが大切であると考えます。また、コロナ禍により加速度的に進んだICT機器の活用を踏まえた道徳科の授業づくりについても考えていかなければならない。

そもそも、道徳の授業とは…「知っていること」を考える時間。「知っていると思っていたことであるが、本当はよく知らなかった」と気付く時間。本音と建前の中で、自分はどうか生きるかを考える時間である。

改めて道徳科の基本、課題について考えてい

1 道徳科の目標について

- (1) 道徳科の目標は、道徳的諸価値についての理解を基に、
 - ・自己を見つめ、[主体的]
 - ・物事を広い視野から多面的・多角的に考え、[対話的]
 - ・人間としての生き方についての考えを深める学習 [深い学び]を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育成すること。
- (2) 考え、議論する道徳科
議論とは、互いの意見を述べ合い、最良の結論を導くこと
「AかBか」「賛成か反対か」というよう

な複数の選択肢を用意して答えさせることをもって多面的・多角的に考えさせたことにしてしまっていないか。物事を広い視野から多面的・多角的に考えさせるためには[対話的]に行うということが大切で、「話し合う」ことが必要。また、「あなただったらどうしますか」と問うことのみで、考えを深めさせたことにしてしまっていないか。「なぜ、そう思うのか」を問い[深い学び]、方法論や指導技術に終始しないことが、考え、議論する授業をつくっていく。

(3) 自己を見つめさせる道徳科

自己を見つめるということは、「過去・現在・未来を貫いて存在する自分」を見つめるということで、後悔したり、劣等感をもったり、見えない未来に向かったりする自分と向き合うことにもつながり、勇気のあることでもある。教師は、生徒に対して結構つらいことをさせるかもしれないという感覚をもつことも必要である。

2 道徳科の内容について

(1) 内容項目

道徳科の内容項目は、よりよく生きていくうえで学ぶことが必要と考えられる道徳的価値を含んでいる。それぞれの内容項目について、生徒の実態や発達段階を踏まえて捉えることが大切である。小学校の段階ではどのような内容を学んできたか、中学校の段階では入学して間もない時期の実態や学年が上がるにつれての実態を踏まえ、内容項目がどのように設定されているかを確認しながら授業をつくっていく。一つ一つの内容項目を生徒理解のための手がかりとしながら、生き方を深く考える授業を工夫して行う。

(2) 道徳科の授業づくり

道徳科の授業づくりは、「生徒の実態や発達段階の理解」を土台として「内容項目の理解」「教材の理解」「問いづくり」が大事な要素となる。

①多様な教材

○読み物教材の意義

教材を読むことで「疑似体験」をすること。疑似体験を通してそこに込められた思いについて考える。

②教材の深い理解

○教材に描かれた人の生き方について、生徒に考えさせたいことを探ること。

○注目する場面はどこか、その言動と心の動きから考えたい内容項目は何か。

③教材の分析と発問

○教材を読み、生徒に考えさせたいことを探る。（注目する場面の言動、心の動き、ねらいとする価値を考え、教材の構図をつかむ）

○発問を考える。生徒の発言を予想する。その問い返しを考える。

中心発問を考え、必要であればその前の発問、その後の発問を考える。

○心情ばかりを問うことは道徳科の改善点だが、判断力にも、実践意欲と態度にも心情が伴ってこそ、より良い生き方につながる。教材を改めてみていく。

④発問づくり…子どもに考えさせたいことを踏まえ、必要な問いは何か、考える。

○中心的な発問…この教材で最も考えたい生き方を問う。ねらいをもった問いが大切

・どんな考えで〔判断力〕(道徳的判断力を養う)

・どんな気持ちで〔心情〕(道徳的心情を養う)

・どんな思いで〔意欲・態度〕(道徳的実践意欲を養う)

※問いに対する生徒の発言を予想する。予想した生徒の発言が出たら、それを問い返し、さらに広く深く考える。予想した発言が出ない場合は、どう深めるか考える。

○中心発問の前…教材の流れを整理したり確認したりする問い。

○中心発問の後…無理にねらいとする価値に結び付けず、その生き方のよさを探る。

○補助発問…自分の言動や生き方を振り返ることにつながる。

例「あなたならどうしますか？」の問いに対する生徒の発言には「どうしてそう思ったの？」という補助発問が必要である。それが生き方を振り返ることになる。

(3) 学習指導案

◇教材

◇ねらい

教材と内容項目を基に、ねらいとする道徳的価値についてどのように考えさせるかを記述する。

- ・教材（…を通して）
- ・内容項目（…しようとする）
- ・道徳性（…を育てる）

◇内容項目

◇ねらいについての明確な指導観

（価値観 生徒観 教材観）

◇導入 ①価値への導入 ②教材への導入 ③授業への導入

※短時間で意欲喚起・問題意識をもたせること

◇展開について

①教材の範読・提示の工夫

・範読の意義…十分な教材研究 考えさせたい場面のための間

②発問の工夫（中心的な発問、前後の発問）

③話し合いの工夫（全体、班、グループ等）
・話し合いは、様々な意見を受け止める機会。まとめたり、どれが正しいかを決めたりしない。

④書く活動の工夫（ワークシート、ノート）

⑤表現活動の工夫（動作化、役割演技等）

⑥板書を生かす活動（思考の整理）

⑦その他（BGM、ゲストティーチャー、TT等）

※一人一台端末、電子黒板、オンラインでの授業、ICT機器の活用
必要に応じて取り入れる。工夫する。

◇終末について

①学習を通して考えたことや新たに分かったことを確かめる。

②学んだことを更に深く心にとどめる。

③これからへの思いや課題について考える。

※書く活動の工夫（ワークシート、一人一台端末）教師の説話、生徒の感想の共有。

※無理に価値に繋げたり、懺悔や決意を強いたりするのではなく、授業そのものを振り返る。

◇評価について

指導過程を通して、授業のねらいに対する生徒の学習状況を評価する方向性や視点を示す。

①ねらいについて、多面的・多角的に考えようとしていたか。

②ねらいについて、自分事として捉え、深く考えようとしていたか。

◇板書とワークシート

①板書について

あらかじめ計画することで、授業の道筋を明確にする。発問に対する生徒の発言を予想し、深く生き方を考えるための準備となる。

②ワークシートについて

・問題や質問の羅列ではなく、中心発問に対する考えと、授業の感想等をまとめる。

・書くタイミングについて注意する。授業の途中で書かせると、書くことに集中し、話を聞いていない生徒がいるという状況になる。書いてから発言させると、書いた内容に縛られる生徒が出てくるという状況になる。

・消しゴムは使わない。考えの跡を残す。

◇ICT機器、一人一台端末の活用のメリットとデメリット

コミュニケーションツールとして使うことに意味があるはずであり、指導という点からのメリットはある。しかし、活動という視点ではデメリットが多いという現実を踏まえることが大切。

①指導のメリット

・資料、集計結果等のタイムリーな提示、共有ができる。

・一人一人の考えが見える。

・記録、保存が容易にできる。

・ポートフォリオとして活用。

・指導と評価をつなげる。

②活動のデメリット

・直接的な意見のやりとりが見えない。共有しにくい。

・対話を広げたり深めたりすることがむずかしい。

・デジタルの文字から受け取れるもののしか読み取れない。



（研修F 模擬授業）

受講者の声(アンケートより抜粋)

※受講者 24 名中 20 名より回答

Q：育成講座に参加しての全体的な感想はいかがでしたか。

大変参考になった (19人)

参考になった (1人)

Q：グループ協議に参加しての全体的な感想はいかがでしたか。

大変参考になった (16人)

参考になった (1人)

あまり参考にならなかった (1人)

Q：感想・ご意見をお聞かせください。

- ・ 道德教育の中の道德科をどうすすめるのかについてわかりやすく講義していただきました。道德科の目標を押さえながら、実態に応じた取組を学校組織全体で続けていきたいと思いました。本校で行なっている、教育課程内の道德教育推進会議を大切にしていきたいです。
- ・ 井上先生の講演では、授業作りの前に一教員として理解しなければならないことを再確認することができた。効率や生産性が重視されている現代の課題を見つめたうえで、その時代を生きる生徒が身につけるべき資質や能力が何なのか。多様な価値観をもち、いかに生きるべきか考え続けるためにできることは何なのかという道德教育の根本を見つめ直すことができた。そのうえで道德科の授業では主体的に考えること、議論を通して多面的・多角的に考えること、教員が生徒とともに学び考える姿勢をもつことが大切である。また、道德科の評価について「道德的価値の理解を深めようとしていたか、自分との関わりで考えたかなどの成長の様子を見取る」という学習の過程を見取る重要性は理解していたが、信頼性が妥当性に繋がるという視点をもていな

かったことに気づいた。今後は、管理職をはじめ、校内の教員と組織的・計画的な評価を推進しなければならないと感じた。

- ・ Society5.0 の予測できない未来を生き抜いていくために、今の子どもたちにとって道德教育がどれだけ大切なものを改めて考えることができました。また、道德指導における目標を達成するために道德的価値の理解や授業改善に努めることの具体的なイメージをもつことができました。
- ・ 森岡先生の講演では、実際に授業を準備・実施する上で重要なことを学ぶことができた。普段、自分がなんとなくしか理解していなかった「会話と対話」「議論と討論」「自分と自己」の違いをしっかりと認識することができた。また、授業をする上で、教材からの読み取りにならないように生徒の発言から「なぜそう思ったのか？」という問い返しを大切にしていきたいと思った。生徒がより深く思考したり、本音を話せる仕掛けをしていくことも重要だと感じた。特に、展開部分での判読や揭示の工夫、発問の工夫、話し合い活動の工夫、書く活動の工夫は教材や生徒の実態に応じて授業者が有効なものを選び取るのが大切である。また、書く活動における、発言のタイミングや消す作業をなくすというのも非常に参考になった。自分が行う授業や担当している生徒の実態に応じて工夫を取り入れていきたい。
- ・ 「こんな授業になっていませんか？」という問いかけに対して今の自分の道德の授業における考え方に当てはまる部分が多く、自然と頷きながら森岡教授の御講話に耳を傾けていました。改めて自分の考え方を改める必要性を感じるとともに、これからの

授業にすぐにでも活かせるようなお話ばかりでした。また、指導案における各項目の大切にしたい考え方なども大変参考になりました。

- ・ねらいの設定の仕方、板書について、「書かせる」ことについてなど、授業づくりにむけてすぐに取り入れられそうなヒントをたくさんいただき参考になりました。指導案検討の時間にも、先生のお話で教えていただいたことを思い出しながら授業作りに生かすことができました。
- ・雛形指導案がない状態で0から指導案を作り上げる難しさを感じました。試行錯誤しながらも、様々な先生方の視点が集約されていくのがとても楽しく思いました。また、他グループの指導案が同じ教材であっても指導方法や中心発問が異なり、大変勉強になりました。
- ・教材分析と指導案作成を、たっぷりの時間の中で他県の先生方と協働しながら進められたのはとても面白かったです。一方、教材については2本の中から1本を選ぶ形式でしたが、後述する時間確保のため最初から1本に絞っておいてもよいかと思いました。また、せっかくの模擬授業だったにも関わらず、授業者・生徒役のリフレクションや参観者からのフィードバックを確認する時間が確保されていなかったのがいささか残念でした。
- ・1つの教材について様々な先生方の視点を聞きあうことによって、深く分析する難しさと同時に面白さを感じました。今回はzoomでの参加となりましたが、他県の先生方と活発に意見交換を行うことができ、大変勉強になりました。対面での話し合いと比較すると制約もありますが、じっくり

と考えを深めて参加することができ、良かったです。進行してくださった先生のお力も大変大きかったと感じています。大変お世話になりました。

- ・今回の研修で扱った教材について新しい視点を持つことができたのはとても有意義だった。とくに『足袋の季節』のおばあさんの言葉に関する考え方は主人公の弱さや醜さ、身勝手さを考える上ではっとさせられる場面である。おばあさんの言葉を自分がより良く生きるための言葉として昇華されていることを生徒に考えさせ発問を考えていきたい。また、所属校に自分が受けた研修をどのように還元していくか、具体的な方針の例を知ることができてよかった。所属校の実情や規模によってできることは変化するが、最も大切であり、取り組むべきものは教員の授業力の向上だと考えた。研修でもあったとおり、研修を設けて、ハードルを作りつつ、教員どうして教材について考え、語り合う場を作りたいと思った。
- ・フォルダを共有することで資料等が簡単に見られることや編集が可能であることがとても良いと感じました。本日の軌跡が持ち帰って見られる点も良いと感じました。
- ・ドライブに資料をあげていただくやり方で問題なかったと思いますし、リアルタイムで更新できるメリットがあったと思います。研修終了後も資料を活用しやすいので、続けていただきたいです。

